

平城京六条以南の宅地で最大の掘立柱建物を発見

平城京跡（左京七条一坊七坪） 柏木町

調査の概要

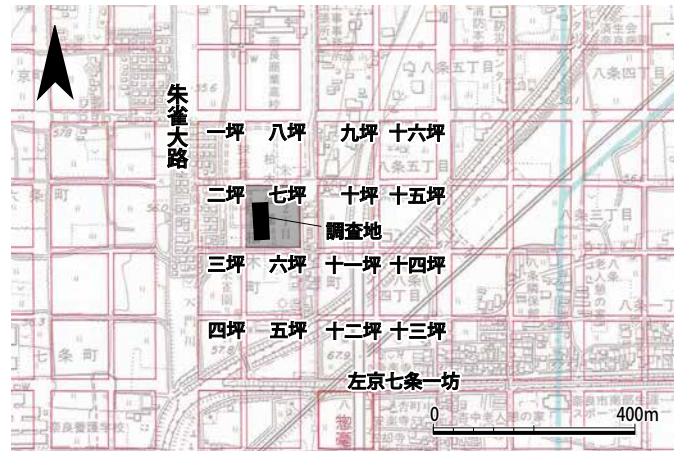
調査地は奈良市柏木町で、平城京の条坊復元では左京七条一坊七坪の西半部にあたります。

検出した遺構には、奈良時代の掘立柱建物 18 棟、掘立柱列 14 条、井戸 1 基、溝、土坑があります。これらの遺構は、重複関係から少なくとも 4 時期に分けられることが判明しました。

奈良時代前半～中頃（Ⅰ期）には、溝によって宅地が区画され、その後小規模な掘立柱建物が建ちます。建物の配置状況から、東西に細長い 1/8 町の土地利用の可能性が考えられます。

奈良時代中頃（Ⅱ・Ⅲ期）になると、Ⅰ期に比べて規模の大きな建物が建てられるようになります。中でも建物 1 は、桁行 6 間（17.8 m）、梁行 2 間（6.0 m）の南廂付東西棟建物で、平城京六条以南の宅地では最大規模の掘立柱建物です。

Ⅱ・Ⅲ期では東西棟建物が南北に並び建っており、推定される七坪の東西 1/4 分割ライン・南北 1/2 分割ラインに建物が位置することから、1/2 町以上の土地利用が行われていたとみられます。また、Ⅱ期・Ⅲ期の建物配置を比較するとほぼ同じ位置に同規模の建物が建っており、一度建て替えられたと考えられます。

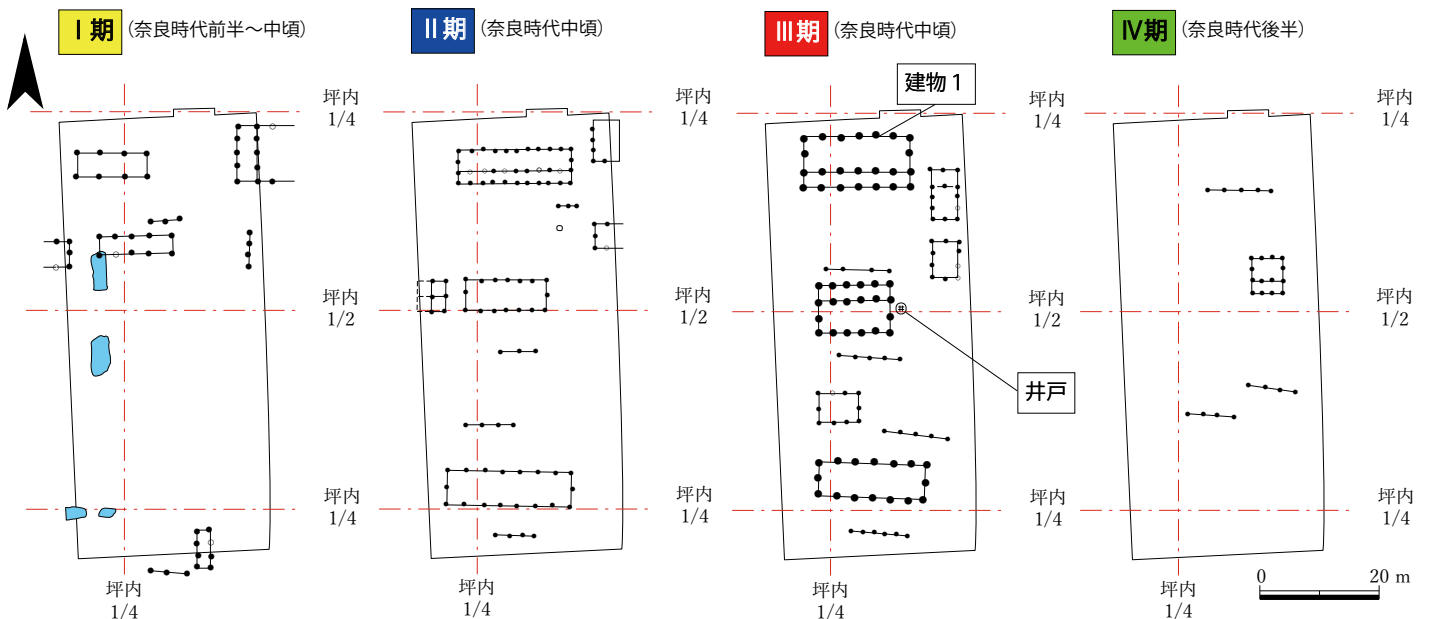


調査地位置図（1/15,000）

その後、奈良時代後半（Ⅳ期）になると、Ⅱ・Ⅲ期とは異なり大型の建物はみられず、小規模な南廂付東西棟建物が 1 棟建つのみとなっています。

七条以南で最大の掘立柱建物と熨斗瓦

Ⅲ期の遺構と考えられる掘立柱建物 1 の柱抜取穴からは、瓦がまとまって出土しています。中でも特に目立つのは熨斗瓦の出土量です。ここでの熨斗瓦は、凹面の中軸に分割の際のあたりとなる刻線が残るものです。建物 1 は檜皮葺もしくは板葺で、屋根の棟部分にのみ瓦を用いた「熨斗棟」であったと考えられます。



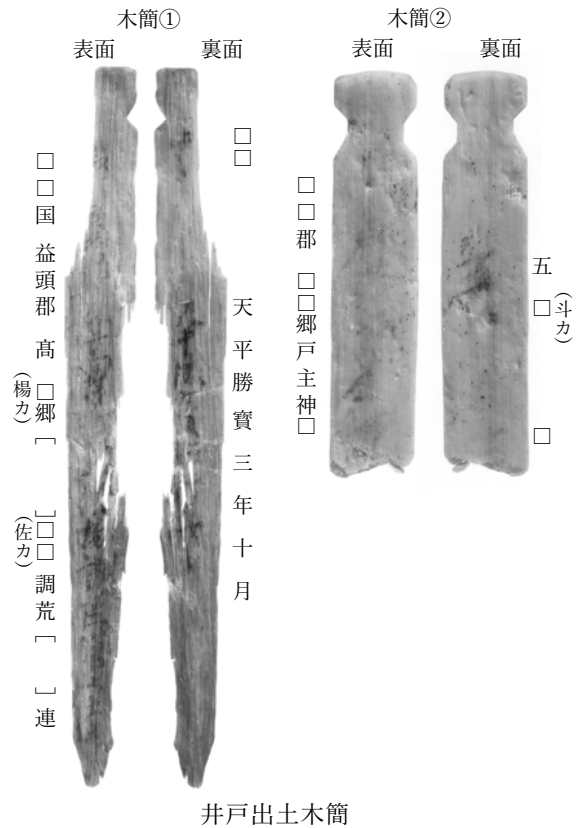
遺構変遷概念図（1/1,250）

井戸出土遺物

建物1と同じⅢ期の遺構と考えられる井戸からは、8世紀中頃の土師器杯・高杯、須恵器甕・杯、曲物、漆椀のほか、木簡2点が出土しました。

木簡はいずれも目視で判読することはできませんでしたが、赤外線調査によって墨書を確認しました。木簡①は残存長21.8cm、幅2.5cm、厚さ0.2cmで、駿河国（現在の静岡県）から運ばれた調（税）のカツオ（荒堅魚）に付けられた荷札木簡とみられます。裏面には天平勝宝3年（751）の墨書があり、木簡①が井戸枠の抜取埋土から出土したことを踏まえると、この井戸は751年からさほど隔たらない時期に埋没したと考えられます。

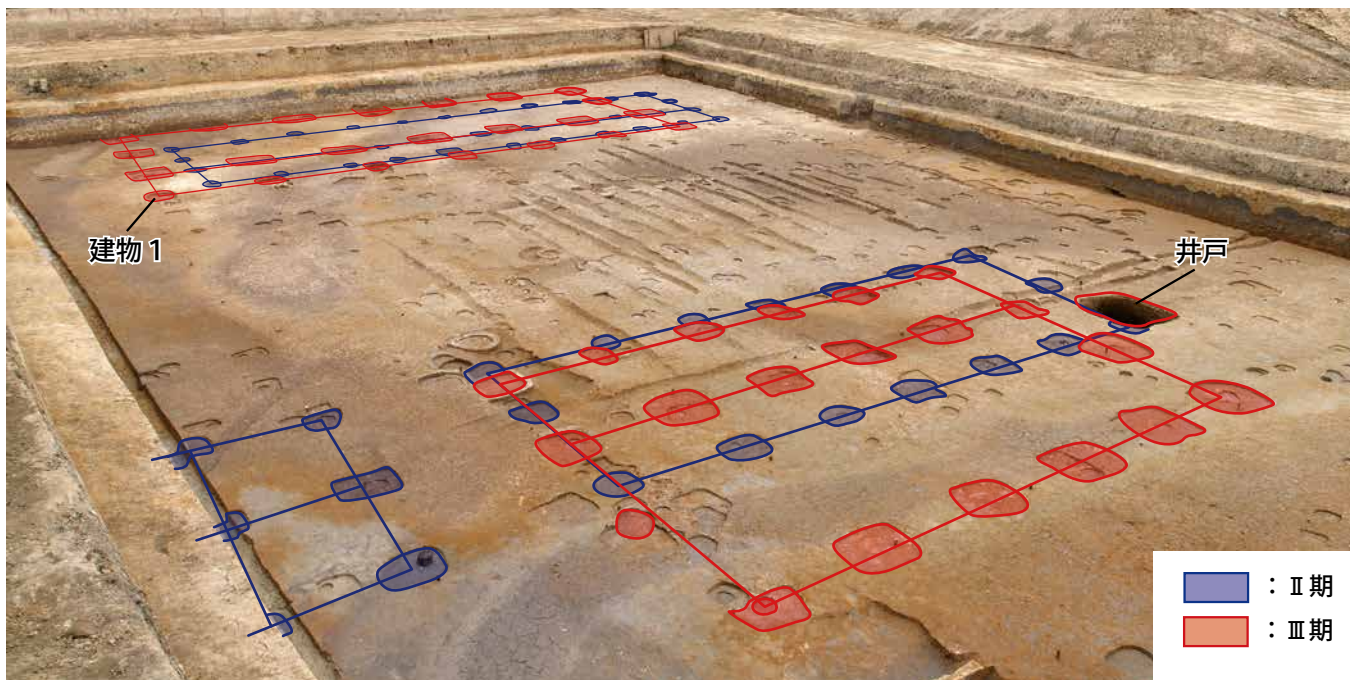
木簡②は残存長12.3cm、幅2.5cm、厚さ0.6cmで、表面に「□□郡□□郷戸主神□」、裏面に「五□（斗カ）□」とあり、こちらも木簡①と同じく荷札木簡とみられます。



建物1 平瓦・熨斗瓦出土状況（南から）



建物1 柱抜取穴出土熨斗瓦 凹面に残る刻線



Ⅱ期・Ⅲ期の大型建物（南西から）